



工 ストニアにベリリツサレという島がある。ビルは日本語で「国境」という名の島だ。エストニアとロシアの間の国境線の一部は、ベイブシ湖というヨーロッパで五番目に大きい湖の真ん中を通っている。その湖に浮かぶベリリツサレ島の面積は約八平方キロメートル。島民数は約一〇〇人で、平均六四歳。島民は主に、タマネギ栽培と漁業で生計を立てている。

この島を訪れてみようと思ったのは、ニュースで見た島に一軒しかないという雑貨屋兼食料品店が、いかにもソ連時代そのままの雰囲気を残していたからである。しかし、ベリリツサレ島を訪れるのは、そう容易なことではない。唯一の交通手段は定期船だが、どうやら夏の間しか運航していないらしい。それも、毎日ではない。結局、二〇〇四年五月のある日曜日、渡島がようやく実現した。タルト市で乗船し、

国境島という名の島

小森 宏美 (こもりひろみ)

地域研究企画交流センター



「カウプルス」(エストニア語で「店」)という看板がかかった島唯一の店。品数は少ないが、老人の多いこの島では、貴重な存在

学 エストニアの母なる川、エマヨキ川を下る約一時間の船旅であった。早速、船着場にあった地図をたよりに、ニュースで見た例の店を目指した。実は、先のニュースではこの店が倒産の危機に瀕しており、島民が善後策を協議していると伝えられていた。ソ連時代そのままの無愛想な店員に、恐る恐る写真をとっていいかたずねた。返事を期待していたわけではない。要は怒られなければいいのだ。止められなかったので、店内の様子を写真におさめた。最後に、日本の黒砂糖菓子に似た味のする、昔ながらのお菓子を買って店を出た。

校や教会はその地域の歴史を雄弁に物語ってくれる。たった一校しかない学校は随分間に廃校になったらしい。教会も、二つあるうちのひとつは使われていない様子だ。その使われていない方の教会を見ると、向かいの家から人が出てきて、ロシア語で話しかけられた。こちらが怪しいロシア語にエストニア語を交えながら応えると、エスト

ニア語は話せないが、理解はできるらしい。その人は、コフトラ・ヤルヴェという、これまたロシア語話者の多い都市で働いており、その日は島に一人で住む母親に会いに帰って来ているという。その母親ができてこうだった。でももう忘れてしまった、と。実はこの島の島民は、一七世紀に宗教迫害を逃れてロシアからやってきた古儀式派(ロシア正教分離派)の人たちを祖先にもつ。そうした来歴から、島民の大半はロシア語話者である。とはいえ、兩大戦開期の国家建設期にはここでもエストニア語教育がおこなわれていたのであるが、年寄りばかりになってしまった現在、島にはそうした言語政策は及んでいない。別れ際、息子の方が自家製の魚の干物をくれ、米月の島の祭りに来たら乗りたいのに、と名残を惜しんでくれた。

食料を手に入れたので、郵便局の敷地内にあったベンチで先程の菓子と塩辛い干物を交互に食べていると、近くの小屋からでてきた国境警備隊員にパスポートの提示を求められた。その隊員は名前と旅券番号を控え、「問題を起こさないように」とだけ言い残して去っていった。どうやらこの島には二名の国境警備隊員が常駐しているらしい。おもしろいことに、西のバルト海に浮かぶ、ラトビアにほど近いキヒス島の監視塔は鉄条網でしっかり囲われていたが、ベリリツサレ島の監視塔には柵も何も無い。あれでは、誰でも登れてしまおうだろう。大国ロシアとの国境を守っているとは思えない、のんびりした風情であった。